

# 2011 年マアジ

単位：数量、1000トン、価格、円/kg

年	数				量				価				格				ムロ	アジ
	漁獲	養殖	産地	輸出入	東京			消費支出 ↑(□)	在庫	加工	産地	輸	東京			消費支出 生(円)		
					生鮮	冷凍	塩干						生鮮	冷凍	塩干			
22	155	1.6	115.1	39.6	17.5	0.5	9.7	1,411	30.9	46.7	160	142	507	294	428	1,380	25.1	11.2
23	160	1.6	119.1	32.3	18.4	0.5	9.3	1,424	30.2		162	146	468	331	447	1,355	28.9	13.1
%	103	100	103	82	105	95	95	101	98	0	101	103	92	113	104	98	115	117

## 漁獲量と資源

23年の漁獲量は16万トンで、前年をやや上回ったものの、平成11年以降の平均20万～25万トン台を本年も引続き下回る低水準であった。

本年は、山陰沿岸で横ばいであったが、主力の東シナ海でやや好調な水揚げであった結果、前年をやや上回った。

主力の東シナ海及び日本海沿岸で主に漁獲される対馬暖流系群の資源量は、1970年代後半に低い水準であったが、その後増加傾向を示し、1993～1998年には、50万～54万トンの高い水準を維持した。1999年以降はそれよりやや低く、2001年は28万トンに減少したが、その後増加して、2004年は55万トンであった。2005年以降は同水準を保ち、2010年は46万トンであった。再生産成功率は、1990年～2000年まで、変動しながら減少傾向を示したが、2001年に急増した。その後は再び減少傾向を示し、2005～2007年はかなり低い値となったが、2008年以降は上向いた。親魚量と加入量には正の相関があり、親魚量が少ない年には高い加入量が出現しない傾向がある、といわれている。

また太平洋系群の資源量は1990年代はじめまで増加し、高位水準になったが、1996年の16万トンを頂点として減少した。その後2000年と2001年は増加したものの、2004年以降は再び減少傾向となり、2010年は5.9万トンと推定されている。親魚量は1984年以降増加し、1992年に最高の6.4万トンとなった後5万トン前後で推移したが、2001年以降は連続して減少し、2010年は2.2万トンと推定されている。

以上のように資源水準は中位であるがその動向は横ばい乃至減少傾向にある。

## ムロアジ類

大中型まき網のマルアジの資源密度指数は増減を繰り返しながらも長期的には減少傾向で推移しており、近年では低い水準にある。マルアジを除くムロアジ類の資源密度指数は1990年代前半までは増減を繰り返しながら推移してきたが、1990年代後半に減少し、2000年代前半にかけて低い水準となった。その後、2006～2008年にかけて増加傾向が認められたが、2009・2010年には再び減少した。マルアジおよびムロアジ類（マルアジ除く）の資源密度指数の相乗平均値は過去約40年間でみると低い水準にあり、最近5年間（2006～2010年）では横ばい傾向で推移している、といわれている。（近年MAX：1990年 10.9万トン）

## 産 地 水 揚 量 と 価 格 ( 4 2 港 )

海域	22年	23年	前年比	月	22年	23年	前年比	月	22年	23年	前年比
東シナ海	61.7	71.6	116	1	6.62	5.93	90	1	140	158	113
山陰	37.9	38.0	100	2	7.46	8.13	109	2	164	137	84
豊後水道	0.4	0.4	89	3	5.65	8.72	154	3	187	167	89
九州東岸	0.7	2.5	336	4	6.27	11.11	177	4	215	182	85
薩南	1.4	1.3	96	5	12.12	12.03	99	5	159	158	99
太平洋	11.3	3.7	33	6	10.70	5.64	53	6	195	267	137
その他日本海	2.0	1.1	56	7	12.60	10.32	82	7	159	218	137
	115.4	118.6	103	8	10.01	11.48	115	8	212	211	100
				9	10.08	8.79	87	9	179	177	99
				10	13.09	13.16	101	10	98	119	121
				11	15.01	12.89	86	11	106	104	98
				12	5.81	10.69	184	12	155	107	69
				計	115.4	118.9	103	計	158	162	103

### 海域別水揚量 月別漁獲量 月別価格推移

23年のマアジの水揚量は、11.9万トンで前年（11.5万トン）をやや上回った。

九州西方海域では、春の盛漁期（4～6月）に好調で昨年を上回る漁であった。その後夏場に漁況が極端に落ちず、しかも、秋口から冬場にかけても前年並みの水揚げとなった結果年間水揚げは前年を上回った。

また、山陰沿岸では春の盛漁期（4～6月）に極めて低調な漁況であったため、昨年を大きく下回る水揚げに終始し、秋漁からの下半期に水揚げを伸ばしたが、結果的には昨年を下回る水揚げとなった。

太平洋側では薩南海域も含め、東海海域を含む太平洋側で漁獲が大幅に減少した。

山陰沿岸では、依然、魚体の大きいマアジは少なく本年も周年豆アジ（0～1歳魚）主体で推移し、餌に廻る割合が多く、依然型の大きいアジは少なかった。

価格は、162円でほぼ前年（160円）並で推移した。

### 輸 入

23年のアジの輸入は、3.2万トンで5～7万トンの近年の範囲を依然かなり下回る水準であり漸減傾向が続き、前年（4万トン）を下回った。

本年は、オランダ1.1万トン（前年：1.3万トン）、ノルウェー0.7万トン（前年：1万トン）、アイルランド0.09万トン（前年：0.08万トン）で主力のオランダ、ノルウェーは減少し、アイルランドが若干ながら増加したのが特徴。また韓国は0.3万トン（前年：0.5万トン）、台湾は0.08万トン（前年：0.1万トン）何れもやや下回った。中国が0.1万トンと前年（0.1万トン）をやや上回った。

価格は、146円で前年（142円）を若干上回った。

### 在 庫 量

本年の在庫量は、3万トンと前年（3.1万トン）を若干下回った。

これは、国内生産が若干の増加であったが輸入の減少を反映したものとみられる。

### **消費地入荷量と価格**

23年の東京消費地の入荷量は、生1.8万トン（前年：1.8万トン）、冷0.5千トン（前年：0.5千トン）であった。塩干物は0.9万トンで前年（1万トン）を生鮮が前年をやや上回ったものの冷凍、塩干は前年をやや下回った。

今年の1世帯あたりの消費支出は本年も数量、金額とも横ばいで推移した。

価格は、生468円（前年：507円）、冷331円（前年：294円）、塩干447円（前年：428円）で、生鮮は入荷の増加を反映し下落したが、冷凍・塩干は入荷の減少を反映し、上昇した。